

『靖節先生集』について

武 井 満 幹

目 次

1. はじめに
2. 江蘇書局本 (広島大学・斯波文庫蔵本)
3. 江蘇書局本 (東洋文庫蔵本)
4. 道光本 (東洋文庫蔵本)
5. おわりに

1. はじめに

陶淵明の詩文を見るには、陶淵明の集、すなわち『陶淵明集』をひもとくが、比較的手頃に見れるものとして、「四部叢刊」所収の『箋注陶淵明集』がある。しかし陶淵明の訳注本や研究論文でも清・陶澍『靖節先生集』(靖節は陶淵明のおくりな)を底本とすることが多く、この陶澍本を使用した方が都合のよいことがある。

近年、中国国家図書館蔵の「汲古閣蔵宋刻遞修本」(いわゆる汲古閣本、汲古閣旧蔵本)が「中華再蔵善本」シリーズの一冊として刊行されたり、台湾国立中央図書館蔵の『東坡先生和陶淵明詩』¹⁾も巻一と巻二が、『中国蘇軾研究』第二輯(中国人民大学中文系主弁、学苑出版社、2005年)に影印されたりするなど、これまで容易には見る事の出来なかったテキストが見られるようになった。これらをはじめその他版本と比較し、陶澍本の校記を確認したり誤りを正したり欠を補ったりすることができる²⁾、始めから例えば汲古閣本を底本として研究者自身で校訂を行うこともできる³⁾。また、逄欽立氏『陶淵明集』(中華書局)、龔斌氏『陶淵明集校箋』(上海古籍出版社)、袁行霈氏『陶淵明集箋注』(中華書局)などのような校訂のしっかりした注釈書を使用することもできる。詩句を確定させたり引用したりするのに、陶澍本に拠らなくてもそういうことができるようになっていると言えよう。それでも陶澍本の価値がなくなったわけではないと思われる⁴⁾。

陶澍本は、陶澍の卒した翌年の道光20年(1840)に彼の外甥周詒樸が刊行し、その後、光緒9年(1883)に江蘇書局より翻刻刊行されている⁶⁾。道光20年に刊行されたものは道光本、光緒9年のほうは江蘇書局本と呼ばれている。現在では「四部備要」所収のものや1956年北京・文学古籍刊行社刊行の戚煥垣校本を見ることができる。筆者の手元には、世界書局の中国學術名著所収『陶靖節集注』(『鮑參軍詩注』と合冊、1974年第4版)、台湾・中華書局の四部備要『靖節先生集』(1986年第5版)、華正書局の『靖節先生集』(1993年10月版)の三種があり、そのほかに上記の文学古籍刊行社のもの、香港・太平書局の『陶靖節集注』(1964年9月版)のあることを確認している。華正書局本と太平書局本は、文学古籍刊行社本と中身は同じである⁵⁾。

筆者はこれまで陶淵明の詩文を見るのに陶澍本を底本とし、その他諸本⁶⁾によって校訂している。その際使用したのは、文学古籍刊行社本や華正書局本であったが、陶澍本を底本とする堀江忠道氏『陶淵明詩文綜合索引』(彙文堂書店、1976年)や龔斌氏『陶淵明集校箋』を参考にしている時に、わずかではあるが文字に異同のあることが気になり、機会があれば、江蘇書局本やさらにさかのぼって道光本を見てみたいと思っていた。

江蘇書局本といえば斯波六郎氏が『陶淵明詩訳注』を執筆する際に底本に用いたテキストである⁷⁾。現在、広島大学中央図書館・斯波文庫に江蘇書局本『靖節先生集』が所蔵されている⁸⁾。この本が、斯波氏が上記書の執筆に実際使用したその本かどうかかわからないが、何か関連があるかもしれない勝手に期待して調査に出かけた。この本には後述のように、字の異同を示したり注を補ったりしている箇所があり、これが江蘇書局本全体についてそうなのなのか、それとも斯波文庫蔵本のみのことなのか

知りたくなり、今度は江蘇書局本と道光本とを所蔵する東洋文庫に調査に出かけた⁹⁾。本稿は、その調査結果を報告するものである。

なお、本稿は厳密な版本考証研究ではなく、単にテキストを見比べた際に気づいたことをまとめたものであることをお断りしておく。また専門の用語も知らないなど稚拙きわまりない。ひらにご容赦願いたい。本来ならば個人のメモとして控えておき、ことさらに取り上げるべきものではないが、筆者は2005年度に本学の特定奨励研究費の助成を受けており、広島大学や東洋文庫への調査もその研究の一環として行った。その調査報告という意味もあると考へ執筆する¹⁰⁾。

2. 江蘇書局本（広島大学・斯波文庫蔵本）

一帙、四冊。第一冊が総目・例言・四庫全書提要・靖節先生集諸本序録・像・図・誄伝雑識・巻一～巻二、第二冊が巻三～巻五、第三冊が巻六～巻十・諸家評陶彙集、第四冊が靖節先生年譜攷異上・下となっている。

斯波氏の蔵書であることを示す蔵書印が、第一冊「例言」1aの第一行、第二冊巻3・1aの第一行、第三冊巻6・1aの第一行、第四冊「年譜攷異・上」1aの第一行にそれぞれ押してある。第三冊、巻六の第九葉が重複して綴じられている。

華正書局本と斯波文庫蔵江蘇書局本とを比べると文字の異同がある。それを以下に示す。作品のタイトルをかかげた後、該当する箇所を含む二句を引用する。先に華正書局本を、行をかえて江蘇書局本を示す。異同のある字に●を附す。また江蘇書局本の方は巻・葉数も記しておく。①～⑯は作品の詩句における異同で、⑰は注における異同である。

①「命子」

凡百有心、特奚於我
→ 凡百有心、特奚于我（巻1・15b）

②「歸鳥」

翼翼歸鳥、翔羽寒條
→ 翼翼歸鳥、戢羽寒條（巻1・17a）

③「九日閒居」〈序〉

空服九華、寄懷于言
→ 空服九華、寄懷於言（巻2・4a）

④「歸園田居」〈其一〉

戸庭無塵雜、虛室有餘閒
→ 戸庭無塵雜、虛室有餘閒（巻2・5b）

⑤「於王撫軍坐送客」

目送回舟遠、情隨萬化移
→ 目送回舟遠、情隨萬化遺（巻2・19a）

⑥「贈羊長史」

多謝綺與角、精爽今何如
→ 多謝綺與角、精爽今何如（巻2・21a）

⑦「乙巳歲三月、爲建威參軍、使都經錢溪」

田園日夢想、安得久離析
→ 園田日夢想、安得久離析（巻3・15b）

⑧「擬古詩」〈其五〉

上絃驚別鶴、下絃操孤鸞
→ 上弦驚別鶴、下絃操孤鸞（巻4・4a）

⑨「雜詩」〈其五〉

前塗當幾許、未知止泊處
→ 前塗當幾許、未知止泊處（巻4・7a）

⑩「雜詩」〈其七〉

弱質與運頹、玄髮早已白
→ 弱質與運頹、元髮早已白（巻4・7b）

⑪「讀山海經」〈其一〉

孟夏草木長、遶屋樹扶疏
→ 孟夏草木長、繞屋樹扶疏（巻4・16b）

⑫「感士不遇賦」

獨祇脩以自勤、豈三省之或廢
→ 獨祇修以自勤、豈三省之或廢（巻5・2b）

⑬「閑情賦」

願在髮而爲澤、刷玄鬢于頰肩
→ 願在髮而爲澤、刷元鬢于頰肩（巻5・5b）

⑭「晉故征西大將軍長史孟府君傳」

君若在、當已作公否
→ 君若在、當已作公不（巻6・8a）

⑮「晉故征西大將軍長史孟府君傳」

孔子稱進德脩業、以及時也
→ 孔子稱進德修業、以及時也（巻6・8b）

⑯「扇上畫贊」

日琴日書、顧盼有儔
→ 日琴日書、顧盼有儔（巻6・14a）

⑰「祭從弟敬遠文」

斂策歸來、爾知我意
→ 斂策歸來、爾知我意（巻7・5b）

⑱「和劉柴桑」詩「慰情良勝無」の注

曲盡貧士嗜酒之常態

→ 曲盡貧女嗜酒之常態 (巻2・16b)

①は、意味上の違いはない。

②は、意味が違って来る。「翔」に作れば翼をはばたかせることとなり、「戢」に作れば翼をおさめることとなる。

③は、①と同じで意味上の違いはない。

④は、江蘇書局本が形似によって誤るのを、直したのである。

⑤「遺」は「のこる」とも「わする」とも訓め、どちらに訓むかで意味が異なってくる。「移」に作れば「わする」と訓んだ場合に近くなるであろう。

⑥は、「角」では意味が通じない。江蘇書局本が形似によって誤るのを、直したのである。

⑦は、転倒しているが意味上違いはない。

⑧は、部首が違うものの意味上の違いはない。

⑨は、「朱」では意味が通じない。江蘇書局本が形似によって誤るのを、直したのである。

⑩は、江蘇書局本が避諱により「元」に作るのを、もとの「玄」に戻したのである。

⑪は、部首が違うものの意味上の違いはない。

⑫は、部首が違うものの意味上の違いはない。

⑬は、⑩と同じで江蘇書局本が避諱によって字を変えているのを、もとに戻したのである。

⑭は、意味上の違いはない。

⑮は、⑫と同じで部首が違うものの意味上の違いはない。

⑯は、「顧盼」も「顧盼」も意味は同じ。「盼」と「盼」は形も似ている。

⑰は、江蘇書局本が形似によって誤るのを、直したのである。

以上のように、字の異同は、ほとんどが部首の違い、形似、避諱によるものと推測できるが、②と⑤はそのいずれでもなく、なぜ異なっているのかわからない。

この本には、批点や標点のほかに、各葉の上部余白部分などに字の異同を示したり注を挿入したりしている箇所が散見する。以下にそれを示す。(朱で書かれたものは、印刷されたもののようにも思われた。)

一. 異同

(1)「五月旦作、和戴主簿」詩十句め「人理固不終」(巻2・14b)

「不」字の左側に○を付け、上部余白に「有」と書かれる。

(2)「和劉柴桑」詩十三句め「慰情良勝無」の注「曲盡貧女嗜酒之常態」(巻2・16b)

「女」字の右側に朱点を打ち右下に少し小さめに朱で「士」と書かれる。

(3)「於王撫軍坐送客」詩の題注「此詩宋武帝永和二年辛酉秋作也」(巻2・18b)

「和」字を○で囲み、上部余白に「初」と書かれる。

(4)「於王撫軍坐送客」詩七句め「洲渚四緬邈」(巻2・18b)

「四緬」の左側に「思緜」と書かれる。

(5)「飲酒」詩〈序〉「余閒居寡歡、兼比夜已長」(巻3・19b)

「比」字の右側に朱点を打ち、上部余白に朱で「此」と書かれる。

(6)「雜詩」〈其四〉九句め「孰若當世時」(巻4・6b)

「時」字の右側に朱点を打ち、上部余白に朱で「士」と書かれる。

(7)「雜詩」〈其五〉十四句め「朱知止泊處」(巻4・7a)

「朱」字の右側に朱点を打ち、上部余白に朱で「未」と書かれる。

(8)「詠貧士」詩〈其二〉五句め「傾壺絕餘粒」(巻4・9b)

「粒」字の右側に朱点を打ち、上部余白に朱で「瀝」と書かれる。

(9)「詠貧士」詩〈其五〉一、二句め「袁安門積雪、邈然不可干」の注「漢書、洛陽大雪丈餘」(巻4・10b)

「漢」字の右側に朱点を打ち、上部余白に朱で「晉」と書かれる。

(10)「詠貧士」詩〈其五〉一、二句め「袁安門積雪、邈然不可干」の注「人見安偃臥」(巻4・10b)

「人」字の右側に朱点を打ち、上部余白に朱で「入」と書かれる。

二. 注の挿入

○「述酒」詩二十八句め「偃息常所親」(巻3・

32a)

「常所」の右側に朱で「始顯酒」と書かれる。

- 「述酒」詩二十九句め「天容自永固」（巻3・32a)

「天容」の右側に朱で「自然」と書かれる。

以下は、上部余白部分に書いてあるもの。

- 「止酒」（巻3・29b)

隆安五年歲饑禁酒此篇蓋此時作先生時三十七歲

- 「述酒」（巻3・31b)

晋書帝紀曰初簡文帝見讖云晋詐尽昌明及孝武帝之在孕也李太后夢神人謂之曰汝生男以昌明為字及産東方始明因以為名

又曰讖云昌明之後有二帝裕及使縊安而立恭帝以応二帝蓋此篇雙陵指安恭三趾有延康元年三趾鳥見於郡国事因借用当東方始明謂昌明讖文也

- 「述酒」（巻3・31b)

古礼天子之階九齒

- 「隆安」の条（「靖節先生年譜攷異・上」21a)

是歲十月京口鎮軍劉牢之發兵討孫恩

十二月詔以牢之都督呉郡諸軍事牢之引劉裕參軍事

3. 江蘇書局本（東洋文庫蔵本）

華正書局本との字の異同については、広島大学・斯波文庫蔵本と同じ。しかし、異同の指摘や注の書き込みは見当たらない。それらは江蘇書局本全般の特徴ではなく、斯波文庫蔵本の特徴であったことがわかる。

4. 道光本（東洋文庫蔵本）

華正書局本との字の異同については、広島大学・斯波文庫蔵本と同じである。

この本の特徴は、巻一～巻五まで各葉の上部余白や左右の余白に朱でびっしりと書き込みが見られることである。これは巻一第一葉aの上部余白にやはり朱で「陶靖節集 柳 何孟春注附」と書かれていることから、明・何孟春『陶靖節集』の注を書き込んだものと思われる。

注ばかりでなく文字の異同の指摘もされている。異同のある字の右上に○を付し、上部余白に字を書き、ここにも右上に○を付す。何孟春本との異同であろう。本稿2にあげた、華正書局本と斯波文庫蔵

江蘇書局本との異同（①～⑱）および斯波文庫蔵本の異同の指摘（(1)～(10)）について、道光本における異同の指摘を比べると、次のようになる。

一、斯波文庫蔵江蘇書局本にはなく、道光本にある

- ①「命子」詩「凡百有心、特奚于我」
④「掃園田居」詩〈其一〉「戸庭無塵雜、虛空有餘閒」
⑧「擬古詩」〈其五〉「上弦驚別鶴、下絃操孤鸞」
上部余白に「絃」○はなし。
⑩「雜詩」〈其七〉「弱質與運頽、元髮早已白」
⑪「讀山海經」詩〈其一〉「孟夏草木長、纒屋樹扶疏」
⑫「感士不遇賦」
「獨祇修以自勤、豈三省之或廢」

二、斯波文庫蔵江蘇書局本にあり、道光本にもある

- (1)「五月旦作、和戴主簿」詩「人理固不終」
(2)「和劉柴桑」詩「慰情良勝無」の注「曲盡貧女嗜酒之常態」
(5)「飲酒」詩〈序〉「余閒居寡歡、兼比夜已長」
(6)「雜詩」〈其四〉「孰若當世時」
(7)「雜詩」〈其五〉「朱知止泊處」
(8)「詠貧士」詩〈其二〉「傾壺絶餘粒」

三、斯波文庫蔵江蘇書局本にあり、道光本にない

- (9)「詠貧士」詩〈其五〉「袁安門積雪、邈然不可干」の注「漢書、洛陽大雪丈餘」
(10)「詠貧士」詩〈其五〉「袁安門積雪、邈然不可干」の注「人見安偃臥」

ところで、道光本と江蘇書局本との違いはどこにあるのだろうか。

第一冊の封面に「陶文毅公原本 靖節先生集」と書かれるのは共通しているが、その裏面に江蘇書局本は篆書で「光緒九年江蘇書局開雕」と書かれているのに対して、道光本にはそれがない。この封面裏面の有無が両者の違いと言えそうである。

もう一つ手がかりとなると思われたのは、巻頭の像と図である。その最終葉の欄外に「原本無象圖偶見拜經樓本有此亟為摹入以補所未備」という二十二字が書かれ、その下に「嵩佺」と書かれた印が押されている。これによると、「原本」にはもともと

像・図がなかったが、拝経楼本から補ったということになる。「高佺」とは、橋川時雄『文字同盟』所収の「陶集鄭批録」¹¹⁾に、白門旧家蔵の陶澗本を重雕した人物として「陳嵩佺」という名が見られ¹²⁾、恐らくこの人物のことであろう。「陳嵩佺」が重雕した本が江蘇書局本であるので、「原本」とは道光本のことであり、道光本には像・図がないのではないかと推測したが、東洋文庫蔵道光本には像・図があり、江蘇書局本と同じく欄外の二十二字および「嵩佺」という印も見られる。

5. おわりに

華正書局本と江蘇書局本や道光本との字の異同が何によるものか一応推測できるものもあればには判断しがたいものもあるが、上記のような異同のあることが確認され、あわせて各本に見られる異同の指摘や注の挿入なども確認することができた。

ところで、筆者の手元にある陶澗本3種の内どれが道光本や江蘇書局本に近いであろうか。華正書局本については本稿で述べた通りであるが、世界書局本と四部備要本にも異同が少しある。世界書局本は⑨⑬⑯⑰が該当し、四部備要本は⑧⑨⑩⑰が該当する。とはいえ華正書局本ほどの異同ではない。像・図の配列、また本稿4にあげた欄外の文字の有無などから見て、台湾・中華書局の四部備要本が、今回調査した道光本や江蘇書局本に近いと言える。

普通の開架図書とは違い、貴重書であるから、訪問先の広島大学中央図書館と(財)東洋文庫では職員の方の手を煩わせることとなった。ここに記して謝意を表したい。

注

- 1) 『東坡先生和陶淵明詩』については、末葭敏久氏「覆宋本『東坡先生和陶淵明詩』について」(『中国中世文学研究』第45・46合併号、2004年)を参照していただきたい。
- 2) 陶澗本と他本とで大きく異なる箇所として、巻二「和郭主簿」詩〈其一〉に見られる異同があげられる。五句め六句めを陶澗本は「息交遊閑臥、坐起弄書琴」に作るが、汲古閣本など他本は「息交遊閑業、臥起弄書琴」に作る。陶澗本に拠る注釈書も、ここは汲古閣本のように作るのが良いと判断され字

句を改めている。その中であって、斯波六郎氏『陶淵明詩訳注』は陶澗本のままに「息交遊閑臥」に作って、「交りを息めて閑かに臥し」と訓み、「遊」については助辞と注す。

- 3) 袁行霈氏の『陶淵明集箋注』(中華書局、2003年)は汲古閣蔵本を底本とし、校勘には宋元刻本を用い、陶澗本は使用しない。
- 4) 5年前に上梓され、現在のところ日本で最も新しい注釈書である『陶淵明集全釈』(田部井文雄・上田武著、明治書院、2001年)も陶澗本を底本とし、その価値について「今から見れば多くの問題を含むにせよ、対象資料の広汎な点、本文校訂の公正につとめている点、さらにその刊行がアヘン戦争と同年であるという点においても、陶澗の『靖節先生集』は、「集注」と「年譜攷異」を含め、前近代の陶淵明研究を総括し、近・現代研究の新しい展開の幕を開く、結節点としての意義を持つ労作であるといえよう」と述べる。
- 5) 文学古籍刊行社本は線装の二冊本で、華正書局本と太平書局本は洋装の一冊本である。華正書局本には編輯部の方針により巻末に「淵明詩話」「統鈔詩話」「論陶」が付されている。
- 6) 紹興本(線装書局刊『陶淵明文集』)、曾集本(『統古逸叢書』所収の『陶淵明文集』)、湯漢本(中華書局刊「古逸叢書・三編」所収や北京図書館出版社刊「中華再造善本」所収の『陶靖節先生詩注』)、李公煥本(「四部叢刊」所収の『箋注陶淵明集』)など。
- 7) 北九州中国書店、1981年(もとは、東門書房、1951年)。「はしがき」に「清、陶澗集注、靖節先生集(江蘇書局本)に據つた」と書かれている。
- 8) 『広島大学ス波文庫漢籍目録』(広島大学附属図書館、1999年)、およびその電子版(<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/siba/index.html>)
- 9) 二種類の江蘇書局刊本が蔵せられる。東洋文庫 HP(<http://www.toyo-bunko.or.jp>)の漢籍オンライン検索の検索結果に書かれる請求記号は、一方が「VI-2-A-2」、もう一方が「VI-2-A-20」。「VI-2-A-2」の方は、帙の題僉に「陶靖節先生全集」と書かれる。
- 10) 陶淵明集については、田部井・上田両氏前掲(注4)書の参考文献に挙げられている論文・著書が参考になる。それらはここには挙げてないが、これに加えて下記の図書も参考になる。
 - 『統校注 唐詩解釈辞典〔付〕歴代詩』(松浦友久編、大修館書店、2001年)付録「テキスト解題」(2)歴代「陶澗」の稿(井上一之氏の執筆)
- 11) 汲古書院、1991年。初出は1927年。
- 12) 「故人北平陳翰林嵩佺校書於蘇州官書局從白門舊家藏棄陶文毅集注靖節先生集善本重雕以傳世」。なお、名前は「陶集版本源流攷」の方には「陳嵩經」と書かれている。